

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第193集

中山砦跡

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財團
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第193集

なか やまとりであと
中山砦跡

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

中山砦跡の所在する愛知県新城市は、平成17年10月1日に愛知県の東部を流れる豊川中流域に位置する新城市に旧南設楽郡鳳来町と旧作手村が合併して現在に至る市であります。古くからの豊川の水運と現在に至る交通路が愛知県の三河地域内はいうまでもなく、長野県南部や静岡県遠江地域とも結ばれた地勢を反映して、政治・文化が営まれてきた地域であります。

この度報告いたします中山砦跡は、日本史上にも著名である長篠城・設楽ヶ原合戦の舞台となる乗本五砦の一つであり、戦国時代を語る上で欠かすことができない遺跡であります。この発掘調査により、戦国時代の遺構と遺物が確認され、乗本五砦の実在した姿を証明することができたことは、戦国時代の戦いを考える上でも貴重な資料になったものと思われます。本書の調査成果が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成27年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財團

理事長 伊藤克博

例　言

1. 本書は愛知県新城市乗本に所在する中山砦跡の発掘調査報告書である。
 2. 調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財團愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
 3. 調査期間は、範囲確認調査が平成 19 年 5 月から 6 月までに実施した。発掘調査は平成 22 年 6 月から平成 22 年 9 月まで、発掘調査面積は 2,830m²である。整理および報告書作成作業は平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月にかけて実施した。
 4. 調査担当者は、範囲確認調査が宮腰健司（本センター統括専門員）・岡久雅浩（本センター調査研究員・現岡崎北高等学校）、発掘調査が松田一訓（本センター調査研究専門員）・藤山誠一（本センター調査研究主任）である。発掘調査は、株式会社島田組の支援を受けた。
 5. 調査にあたっては、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、新城市教育委員会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
 6. 本書の編集は藤山誠一が担当した。
 7. 整理作業は藤山誠一が担当した。整理作業は阿部裕恵・木下由貴子（整理補助員）の協力を得て実施した。また、写真撮影を写真工房遊（金子知久）に委託して実施した。
 8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅷ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
 9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
 10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
- 〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4161)
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)

 12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けています。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
愛知中世城郭研究会・長篠城址史跡保存館・阿部伊三夫・石川浩治・岩山欣一・奥田敏春・高田徹・津野仁・山内祥三

目 次

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法	1
第2節 中山砦跡の立地	2
第3節 長篠城跡周辺の陣所・砦跡	2
第4節 合戦時の乗本五砦の状況	3

第2章 遺 構 と 遺 物

第1節 基本層序	4
第2節 10A 区の遺構	4
第3節 10B 区の遺構	8
第4節 鉄鎌	18

第3章 総 括

第1節 中山砦跡の遺構について	19
第2節 中山砦跡出土の鉄鎌について	19
第3節 まとめ	20

付 論 長篠城址史跡保存館保管の鉄鎌・鉄槍

第1節 はじめに	24
第2節 長篠城址史跡保存館保管の資料	24
第3節 鉄鎌・鉄槍の特徴	27
第4節 まとめ	27

写真図版

遺構：写真図版 1～写真図版 11

鉄鎌：写真図版 12

抄 錄

挿図・写真目次

図 1 中山砦跡位置図	1
図 2 中山砦跡の調査区の位置と周辺の城・陣所・砦跡 (1:20,000)	2
図 3 中山砦跡発掘調査前地形測量図 (1:1,000)	5
図 4 10A 区平面図 (1:500)	6
図 5 10A 区セクション図 1(1:100)	7
図 6 10A 区セクション図 2(1:100)	9
図 7 10A 区セクション図 3(1:100)	10
図 8 10A 区セクション図 4(1:100)	11
図 9 10A 区 01SA・02SD・03SK ~ 05SK(1:100)	12
図 10 10A 区 01SA・02SD・03SK・11SD · 12SX(1:100)	13
図 11 10A 区個別遺構断面図 1(1:100)	14
図 12 10A 区個別遺構断面図 2(1:100)	15
図 13 10B 区平面図 (1:250)	16
図 14 10B 区セクション図 (1:200)	16
図 15 10B 区個別遺構断面図 (1:100)	17
図 16 鉄礮実測図 (1:1)	18
図 17 中山砦跡縛張り図	19
図 18 戦国時代における東海地方の鉄礮 1(1:4)	21
図 19 戦国時代における東海地方の鉄礮 2(1:4)	22
図 20 長篠城址史跡保存館保管の鉄槍 (1:2)	25
図 21 長篠城址史跡保存館保管の鉄槍 (1:2)	26

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法

中山砦跡は愛知県新城市乗本に所在する遺跡で（図1）、JR飯田線鳥居駅より東約1.0kmの地点に位置する。本遺跡は埋蔵文化財包蔵地一覧に中山砦跡（県遺跡番号773019）として周知の遺跡として知られており、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所による第二東海自動車道横浜名古屋線建設に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室から委託を受けた公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査が平成19年5月から6月にかけて行われた結果、出土遺物はないものの、壠状遺構と土壘状遺構が確認された。この為、第二東海自動車道横浜名古屋線建設事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成22年6月から平成22年9月にかけて、発掘調査を実施した。

調査面積は2,830m²で、調査地点は第二東海自動車道横浜名古屋線路線内にかかる丘陵尾根地点を中心に、南側丘陵において東西約140mの範囲にわたる10A区、北側丘陵において東西約25mの範囲にわたる10B区の2ヶ所の調査区で実施した（図2）。

発掘調査の工程は、10A区を平成22年6月7日～



写真1 地元説明会の状況

同年9月17日に、10B区を平成22年8月17日～同年9月17日である。発掘調査の終了後、平成25年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法は全て人力掘削により表土となる腐植土層とその影響を受けたと思われる地層を除去した後、遺構検出、遺構検出状況の写真撮影、人力による遺構掘削、遺構の完掘状況の写真撮影、遺構の測量と観察などを行なった。

遺跡の地元説明会を平成22年9月12日（日）に実施し、74名の参加者を得た。また平成22年5月9日（日）に愛知中世城郭研究会（11名）の見学、新城市立長篠小学校六年生の生徒による発掘調査現場の見学があった。



図1 中山砦跡位置図



図2 中山砦跡の調査区の位置と周辺の城・陣所・砦跡（1:20,000）

第2節 中山砦跡の立地

中山砦跡は、新城市の東部に位置し、地形的には、豊川が北西から流れる寒狭川と北東から流れる宇連川の合流する地点の東岸にある天神山から派生する北西側尾根筋の先端に立地している。遺跡のある豊川東岸の地質は、三波川結晶片麻岩を基本とするもので、遺跡周辺の丘陵においても、地表面に岩の露出する箇所を散見できる。中山砦跡はこのような地形的特徴を利用した遺跡で、調査区内における遺構検出面は標高100mから120mで、谷からの標高差は約40mである。中山砦跡からの眺望は、遺跡の北西約500mの宇連川の西岸に国史跡の長篠城址を見下ろすことができ、西約3kmにある設楽ヶ原決戦場を望むことができる。

第3節 長篠城跡周辺の陣所・砦跡

中山砦跡は、長篠・設楽ヶ原合戦の長篠城攻防戦の為に築かれた乗本五砦の一つで、永正五年（1508）に今川氏親の影響下で音沼元成が築城した長篠城跡を攻撃する際の砦として利用されたものである。文献からは徳川家康が天正元年（1573）7月に長篠城跡を武田

氏方から奪還する際に、南に隣接する久間山砦跡とともに築かせたと伝えられる。その後武田勝頼が天正三年（1575）5月に奥平貞昌が守る徳川氏方の長篠城跡を攻める際に、長篠城跡の北にある武田勝頼本陣とされる医王寺山武田勝頼陣所跡と武田信豊・馬場信房等が陣をおいた大通寺山陣所跡、一条信竜・真田信綱等が陣をおいた天神山陣所跡、長篠城跡から宇連川を挟んだ東岸に北から姥ヶ懐砦跡・君ヶ伏床砦跡・鳶ヶ巣山砦跡・中山砦跡・久間山砦跡を設け、陣を置いたとされる。これらの砦・陣所跡は発掘調査による検証はなされていないが、医王寺山武田勝頼陣所跡と大通寺山陣所跡は比較的大規模な平場が現在でも確認できる。宇連川東岸にある五砦跡に関しては、姥ヶ懐砦跡・君ヶ伏床砦跡・鳶ヶ巣山砦跡・中山砦跡・久間山砦跡においても平場が確認できるが、近代以後の地形変更も多くみられるようであり、現在残る平場などが全て当時の姿を伝えているのかは不明である。これらの砦・陣所跡は、長篠城跡から最も遠い君ヶ伏戸砦跡が約1300m離れているが、その他は約500m～750m離れた地点にあり、現在の樹木がなければ、長篠城跡が一望できる位置にある。

第4節 合戦時の乗本五砦の状況

1994年に刊行された『鳳来町誌』第4章において竹下弘氏によりまとめられた「長篠の戦い」では、旧陸軍参謀本部が明治時代に編纂した『日本戦史・長篠役』を参考にした「長篠城攻め武田軍の配置」として、

本陣医王寺山	武田勝頼、同信友・信光、望月信雅等 三〇〇〇人
--------	-------------------------

同 後方	甘利信康、小山田信茂、跡部勝資等 二〇〇〇人
------	------------------------

大通寺山	武田信豊、馬場信春、小山田昌行等 二〇〇〇人
------	------------------------

水上山（天神山）	一条信竜、真田信綱、同昌輝、土屋昌次等 二五〇〇人
----------	---------------------------

岩代方面	内藤昌豊、小幡信貞等 二〇〇〇人
------	------------------

篠場野	武田信廉、穴山信君、原昌胤、菅沼定直（定忠）等一五〇〇人
-----	------------------------------

有海村	山県昌景、高坂昌澄等遊軍一〇〇〇人
-----	-------------------

鳩ヶ巣山	武田信実、小見山信近等 五〇〇人
------	------------------

姥ヶ懐	三枝守友、同守義・守光、草刈隼人助、宍戸大膳等 四五〇人
-----	------------------------------

君ヶ伏床	和田信業、長竹昌基、反町大膳等 三〇〇人
------	----------------------

中山	名和宗安、飯尾助友、同祐国、名和田晴繼、五味貞氏等 五二〇人
----	--------------------------------

久間山	和氣宗勝、大戸直光、倉賀野秀景、原胤成等 六〇〇人
-----	---------------------------

とあり、先に述べた砦・陣所跡では、医王寺山武田勝頼陣所跡と大通寺山陣所跡、天神山陣所跡では2000名を超える兵が配置され、長篠城の北西の寒狭川（豊川）左岸に陣をおいたとされる岩代方面や長篠城址から寒狭川を挟んだ右岸の東において有海村と篠場野の陣の兵の数より多く、武田氏の軍の主力である。また長篠城址から宇連川を挟んだ東岸にある姥ヶ懐砦跡、君ヶ伏床砦跡、鳩ヶ巣山砦跡、中山砦跡、久間山砦跡は兵の数が300名～600名で、長篠城址を囲む押さえのような配置と思われる。只、興味深いのは現在残る平場等の調査では、北側にある姥ヶ懐砦跡、君ヶ伏床砦跡、鳩ヶ巣山砦跡が南側にある中山砦跡、久間山砦

跡より明らかに平場等の数や広がりが大きいが、配置された兵の数は南側の中山砦跡、久間山砦跡の方が多い、この記録からみると合戦時には、小さい砦跡と思われる久間山砦跡や中山砦跡に重要性が高く読み取れる。

これらの砦・陣所跡は、天文三年（1575）5月8日の武田氏による長篠城跡の攻撃から始まり、同年5月21日の連吾川を挟んだ決戦において武田氏が敗退するまで使用されたと思われる。この短い期間であるが、鳩ヶ巣山砦跡では、「信長公記」には小屋の存在が記されており、砦・陣所跡にも小屋や櫓などが設けられていた可能性が高い。長篠城跡の南東を囲む押さえの役割である中山砦跡をはじめとする乗本五砦が歴史に特に名を残すのは、織田信長の命令により派遣された徳川方の酒井忠次軍による松山越えの奇襲作戦による。この作戦の成功は、長篠城跡の武田軍による包囲を解くものであり、織田・徳川軍の勝利を確定するものになったとされる。乗本五砦に関する研究などは多くあるが、1933年に刊行された柿原明十による『鳩ヶ巣奇襲と合戦問答 長篠合戦記』に詳しい。

参考文献

柿原明十 1933『鳩ヶ巣奇襲と合戦問答 長篠合戦記』（昭和60年長篠役鳩ヶ巣陣戦没將士之墓碑建設会より復刊）

太田牛一著・桑田忠親校注 1979『改訂信長公記』株式会社新人物往来社

新城市誌編集委員会 1963『新城市誌』愛知県新城市

鳳来町教育委員会編 1994『鳳来町誌』歴史編、愛知県南設楽郡鳳来町

高田 敏 1996「三河長篠城及び長篠合戦陣所群に関する検討」『中世城郭研究』創刊10周年記念号 第10号、中世城郭研究会

梅木博志・安藤義弘編 1997『愛知県中世城館跡調査報告』III（東三河地区）愛知県教育委員会

岩山欣司 2005『史跡長篠城跡』（IV）『鳳来町埋蔵文化財調査報告書第4集』鳳来町教育委員会

他にも、長篠・設楽ヶ原合戦に関する文献資料、調査・研究は多数あるが、全てを管見見ておらず、十分に検討できていない部分も多い。

第2章 遺構と遺物

第1節 基本層序

遺跡の基本層序は、東から西へのびる丘陵の南側の丘陵上にある 10A 区と北側の丘陵上にある 10B 区の地点があるが、どちらの地点も基本的に同様な堆積状況であり、地表面から深さ 0.05m ~ 0.20m で地山である片麻岩からなる岩盤と片麻岩が風化してきた黄褐色シルトにいたる。地表面の腐植土とその影響の度合いにより 10A 区の東丘陵側の地点では 3ヶ所分層できたが、その他の地点では地表面と地山の間は基本的に 1 層で、地表面にある腐植土と腐植土からの影響を受けた黄褐色シルトがあまり分層できない状態で堆積していた。この堆積中には地山である片麻岩から派生した礫が多数含まれた。

第2節 10A 区の遺構

戦国時代の堀切 2 条（10A 区 02SD・11SD）と土星 1 条（10A 区 01SA）があり、比較的新しい時代のものと考えられる土坑 3 基（10A 区 03SK ~ 05SK・10SK）と平場遺構 4 面（10A 区 06SX ~ 09SX）が確認できた。

01SA：10A 区の東側に位置する丘陵尾根に対して直角に設けられた土壁で、最大幅 4.5m、確認できる南北の長さは 12m 程である。高さは西の平場である 07SX から 0.75m、東の堀切である 02SD・11SD の上端から 1.20m で、丘陵尾根の頂部付近に最高点があり、標高 118.75m をはかる。01SA は発掘調査前から 01SA の頂部に腐植土がなく、地山の岩盤層が風化したと考えられる風化した小礫を若干含む明赤褐色シルト層の上に盛土の可能性のある黄褐色シルト層の堆積が 0.20m ~ 0.28m みられた。地山と盛土を分けた根拠は、色調の違いで、色調の違いを反映すると考えられる腐植土の影響の度合い（色調の濁りや灰色化）と地山の風化度の違い（黄橙色から黄色への変化）により分類した。また分層した堆積が、01SA の下部の地山は東側の 02SD・11SD 側に下がる傾斜をもつに対し、

01SA の上部の 2 層は水平方向に及んでいた。この盛土の可能性のある黄褐色シルト層は腐植土の影響度合により、2 層に分層でき、上層の堆積の方が人为的盛土の可能性が高く、下層は地山の可能性も残る。02SD・11SD：01SA の東に並行する位置にある幅 1.2m ~ 2.0m の南北溝で、10A 区の丘陵を西と東に分ける。溝は 1 度の掘り直しが確認でき、始めに掘られた溝が 11SD で、後に掘り直された溝が 02SD である。11SD は地山の岩盤層まで掘削した溝底の幅が 0.4m 前後ある断面「V」字状の形で、溝底の標高は 116.5m 前後にあり、01SA の頂部との比高差で、2.25m 程である。02SD は 11SD の 01SA がある西側に「V」字状の断面の形で掘削されており、溝底は 11SD より 0.1m 程高い。02SD と 11SD の北端部分は 11SD の底面から 0.50m 程、地山が掘り残された部分 12SX があった。溝の埋土は 11SD の方が 02SD より灰色化の濁りが少なく明るい色調で、11SD の埋土は明褐色～黄褐色シルトにやや大きめの小礫まで多数含まれるもの、02SD の埋土は黄褐色～にぶい黄褐色シルトで風化した小礫を含むものであった。03SK：02SD の上から掘り込まれた土坑で、発掘調査前から開口しており、現代に近い落とし穴か戦国時代の蔵に伴う井戸の可能性が考えられた。土坑の埋土の上層からビール瓶が 1 本出土した。平面は径 1.60m の円形で、深さは 2.50m であった。埋土は標高 115.70m 付近まで埋没しており、埋土の上層 0.30m は落葉と腐植土の堆積、中層の 0.35m は小礫混じりのオリーブ褐色シルトと地山起源のにぶい黄褐色シルトブロック状の堆積、下層の 0.35m は黄褐色シルトを主体に地山の褐色シルトと岩盤層の剥片が入る堆積であった。04SK・05SK：04SK と 05SK は 02SD 内の 03SK の南と北にある土坑で、発掘調査前の現況においても、凹みが確認できた。遺構の規模は、04SK が南北 2.50m、東西 1.75m、深さ 0.10m、05SK が長径 4.75m、短径 2.00m、深さ 0.16m である。埋土はどちらも地表面付近の腐植土の影響を受けた黄褐色シルトで、05SK の

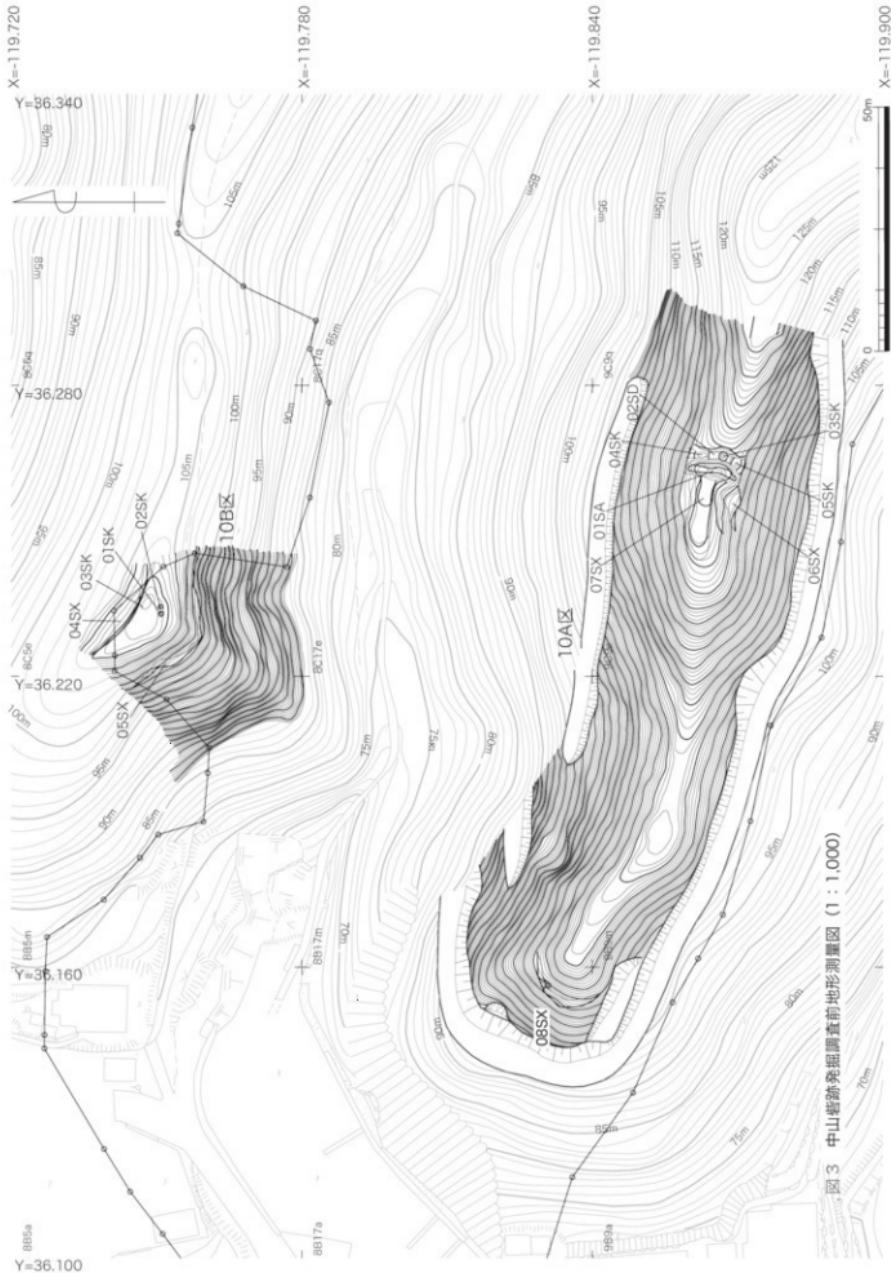


図3 中山遺跡発掘調査前地形測量図 (1 : 1,000)

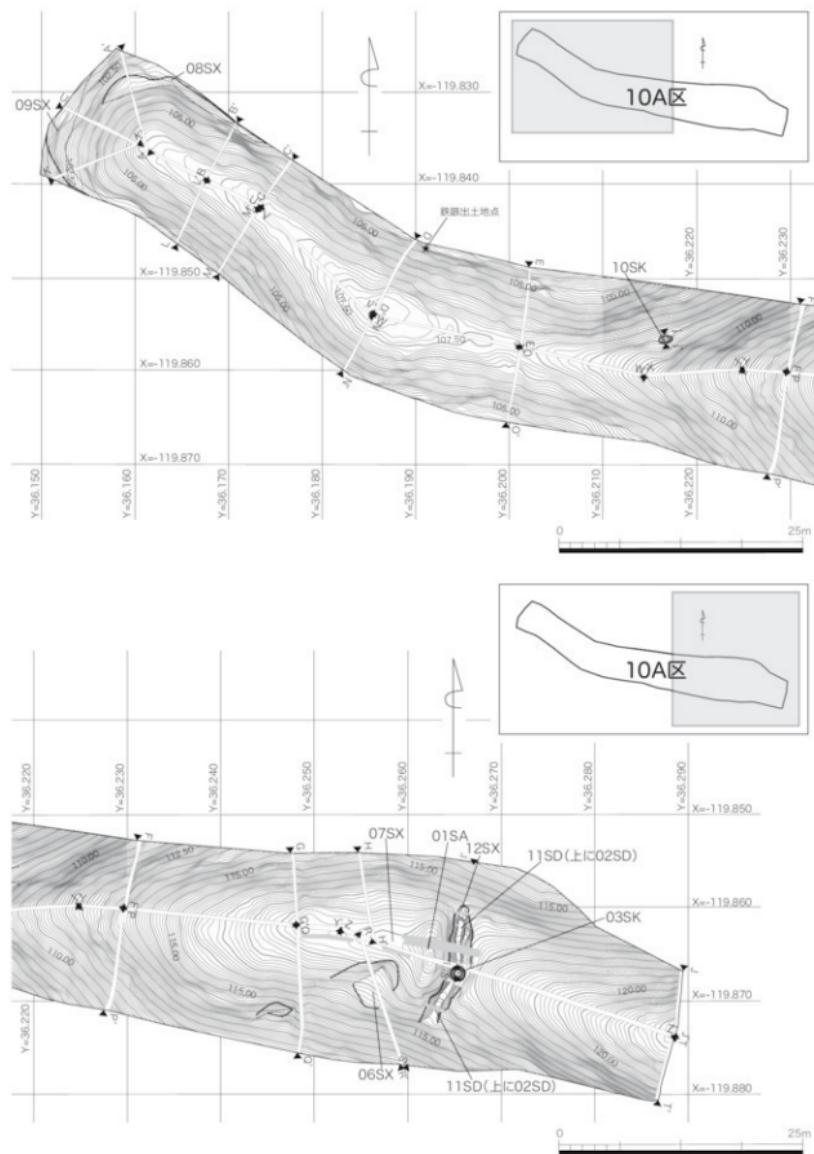


図4 10A区平面図 (1:500)

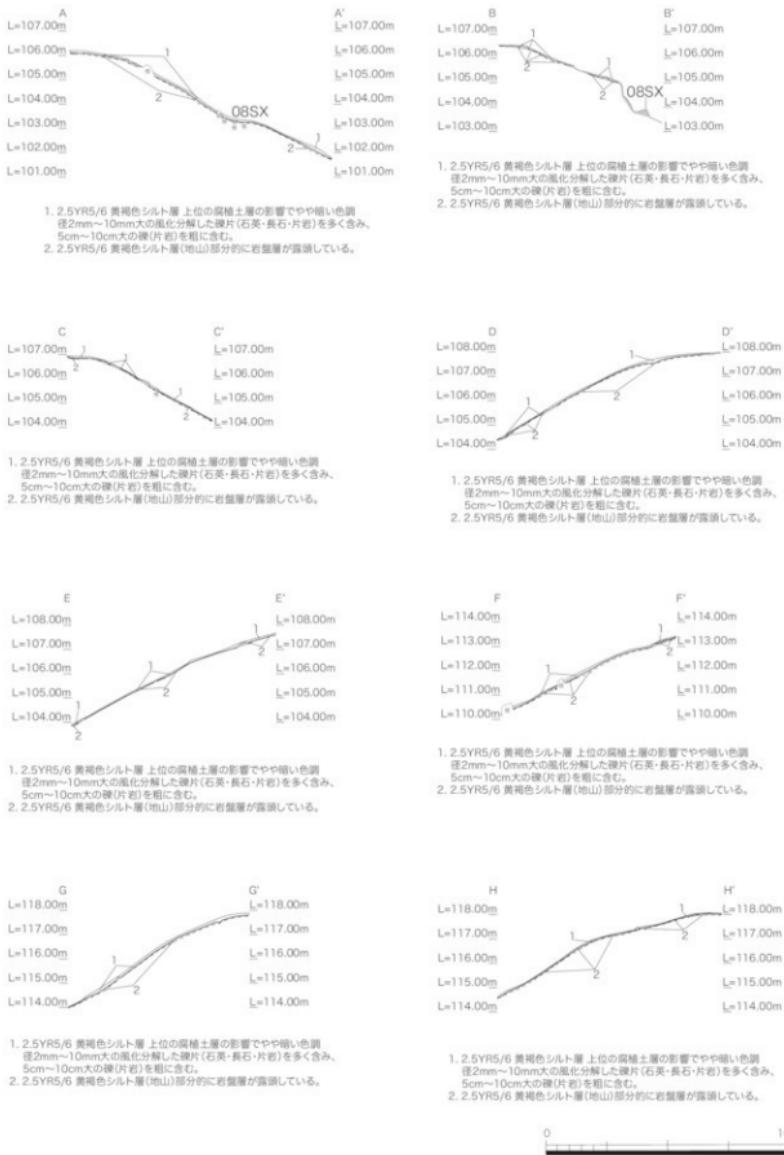


図5 10A区セクション図1 (1:200)

埋土では焼土や炭が多量に含まれていた。05SKの底面では焚き火の跡と思われる径1.5m～1.6mの範囲で強い被熱を受けた痕跡があった。また05SKからアルミ製の皿が出土した。この2基の土坑は03SKの周囲0.5m～1.0mを残して02SDの中を掘り下げたもので、10A区の尾根を下りてきた動物を03SKのある掘り残し部に誘導する埋込みと考えられ、03SKの落とし穴に動物を落とす為の仕掛けに関連するものと考えられる。

06SX：01SAの南西側で、丘陵尾根側を高さ1.0m程掘り込んで形成された平場跡で、東西7.0m、南北5.0m程の規模をはかる。埋土は表土である腐植土とその影響を受けた黄褐色シルトの堆積があるのみであった。

平場となる06SXにおいて、関連する遺構や遺物は確認できなかった。06SXの南西7m付近にある小さい平場も06SXとの関係が想定され、南西にある人家から尾根に登ってくる上り道であった可能性がある。

07SX：01SAの西にある平場で、東西約10m、南北3m前後の規模をはかる。埋土は地表面にある腐植土と腐植土の影響を受けた黄褐色シルトのみ堆積していた。

08SX・09SX：08SXは10A区の西側先端付近から南側斜面にかけて、東西21.5mに及んで確認できた帶曲輪状の平場で、標高10150m～103.50m付近に幅0.5m～2.0mの緩斜面が確認できた。この平場は発掘調査前から確認できており、09SXと同様の形態をもち、木材伐採用の作業道として形成されたものと推定できる。09SXは10A区の丘陵尾根先端部の先端から北側斜面に確認できた帶曲輪状の平場で、標高103.00m～103.50m付近に幅0.6m～1.0mの緩斜面を確認した。

埋土は地表面にある腐植土と腐植土の影響を受けた黄褐色シルトのみ堆積していた。

10SK：10A区中央付近の尾根北側斜面にて確認できた土坑で、平面は長径1.50m、短径0.80mの楕円形であった。断面は丸底で、深さ0.40mをはかる。埋土は上層が暗褐色腐植土、下層が地山の岩盤剥離層が堆積していた。

12SX：02SDと11SDの陸橋にあたると思われる遺構で、02SD・11SDの北端部分で地山が11SDの底面から0.50m高く掘り残されていたものである。現在残る

幅は0.50m程である。

第3節 10B区の遺構

戦国時代の遺構はなく、近代以後である新しい時期の遺構と考えられる土坑3基（10B区01SK～03SK）、平場遺構4面（10B区04SX～07SX）がある。遺物の出土もなかった。

01SK：発掘調査前の現況においても地表面が5cm～10cm程くぼんでいた。長径1.00m、短径0.85m、深さ0.60m程の平面円形、断面袋状や平底の土坑で、上層は枯れ葉等が分解されずに残る黒褐色腐植土で、下層は黄褐色シルトが堆積していた。

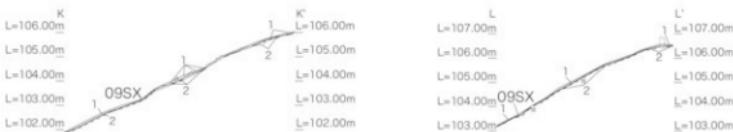
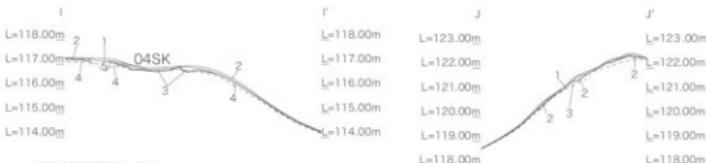
02SK：発掘調査前の現況においても地表面が5cm～10cm程くぼんでいた。長径0.90m、短径0.75m、深さ0.30m程の平面円形、断面袋状や平底の土坑で、上層は枯れ葉等が分解されずに残る黒褐色腐植土で、下層は黄褐色シルトが堆積していた。

03SK：発掘調査前の現況においても横穴として空洞が残存しており、穴の入り口部分にトタン板も落ちていた。長径3.30m、短径1.45m、深さ1.50mの大型の土坑で、人間を入れる室状であった。埋土は上層に黒褐色腐植土が堆積しており、下層は地山の岩盤層等が崩落した黄褐色シルトや明黄褐色シルトが堆積していた。

04SX：丘陵北斜面を平面菱形に削りだした平場で、平場は調査区の北にのびているが、調査区内で長径10.0m、幅2.5m、深さ0.70m～0.80mを測る。平場面は標高106.50m付近で谷がある北に少し下がって傾斜していた。埋土は上部に表土の腐植土の影響を受けたやや暗い黄褐色シルトが堆積していた。この平場に伴って03SKは設けられたものと考えられる。

05SX：丘陵南斜面を東西の帯状に削りだした平場で、平場は調査区の外である東にのびているが、調査区内で長径17.0m、幅1.0mを確認した。平場面は標高103.40m～104.00m付近で谷がある南に下がって傾斜していて、水平ではなく緩斜面である。埋土は上部に表土の腐植土の影響を受けたやや暗い黄褐色シルトが堆積していた。

06SX：丘陵南斜面を東西の帯状に削りだした平場で、



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐殖土層の影響でやや暗い色調
従2mm~10mm大的風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm~10cm大的礫(片岩)を相に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐殖土層の影響でやや暗い色調
従2mm~10mm大的風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm~10cm大的礫(片岩)を相に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。

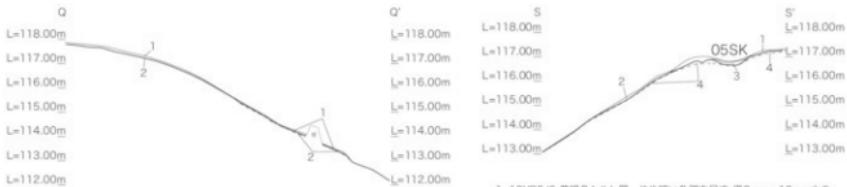


1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐殖土層の影響でやや暗い色調
従2mm~10mm大的風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm~10cm大的礫(片岩)を相に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。

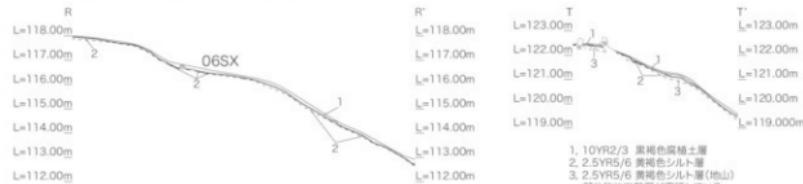
1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐殖土層の影響でやや暗い色調
従2mm~10mm大的風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、
5cm~10cm大的礫(片岩)を相に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



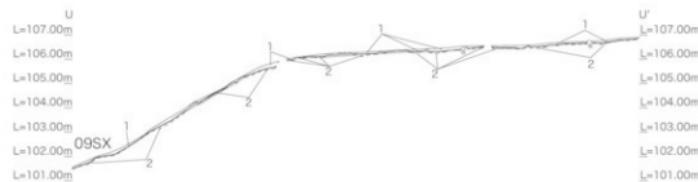
図6 10A区セクション図2 (1:200)



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山)部分的に岩盤層が露頭している。



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 部分的に岩盤層が露頭している



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 部分的に岩盤層が露頭している



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 部分的に岩盤層が露頭している

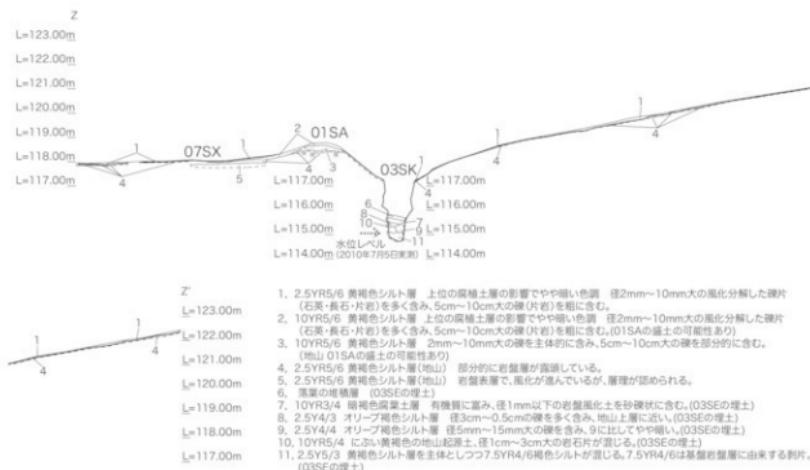
図 7 10A 区セクション図 3 (1:200)



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 部分的に岩盤層が露頭している



1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 部分的に岩盤層が露頭している

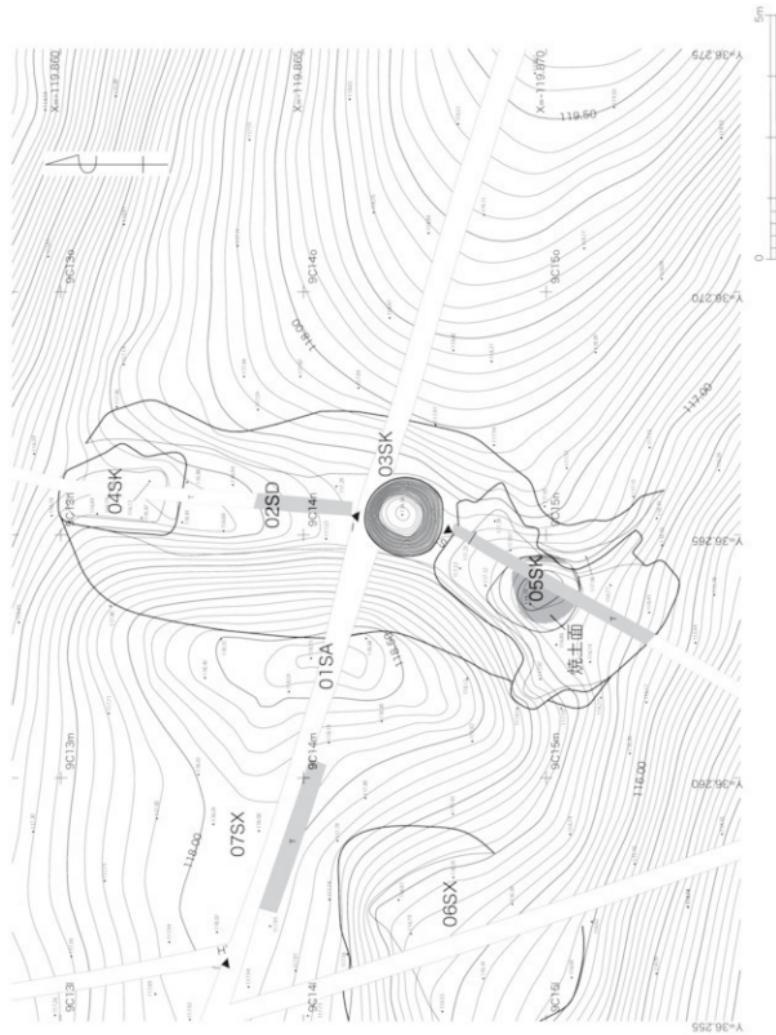


1. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。
2. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調 径2mm~10mm大の風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cm大の礫(片岩)を粗に含む。(O1SAの堆土の可能性あり)
3. 10YR5/6 黄褐色シルト層 径2mm~10mm大の礫(片岩)を主的に含み、5cm~10cm大の礫を部分的に含む。(地山 O1SAの堆土の可能性あり)
4. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 部分的に岩盤層が露頭している。
5. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 岩盤層で、風化が進んでいるが、堆積が認められる。
6. 墓場の堆積層 (O3SEの堆土)
7. 10YR3/6 暗褐色腐葉土層 有機質に富み、径1mm以下の岩盤風化土を砂状に含む。(O3SEの堆土)
8. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト層 径3cm~0.5cmの礫を多く含み、地山上面に近い。(O3SEの堆土)
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト層 径5mm~15mmの礫を含み、9に比してやや暗い。(O3SEの堆土)
10. 10YR5/6 黄褐色シルト層(地山) 岩盤層で、径1cm~3cmの大岩岩石が混じる。(O3SEの堆土)
11. 2.5YR5/6 黄褐色シルト層(地体) 2.5YR4/6 黄褐色シルト層が混じる。7.5Y4/6は墓場堆積層に由来する片岩(O3SEの堆土)。



図8 10A区セクション図4 (1:200)

図 9 10A 区 01SA・02SD・03SK ~ 05SK (1:100)



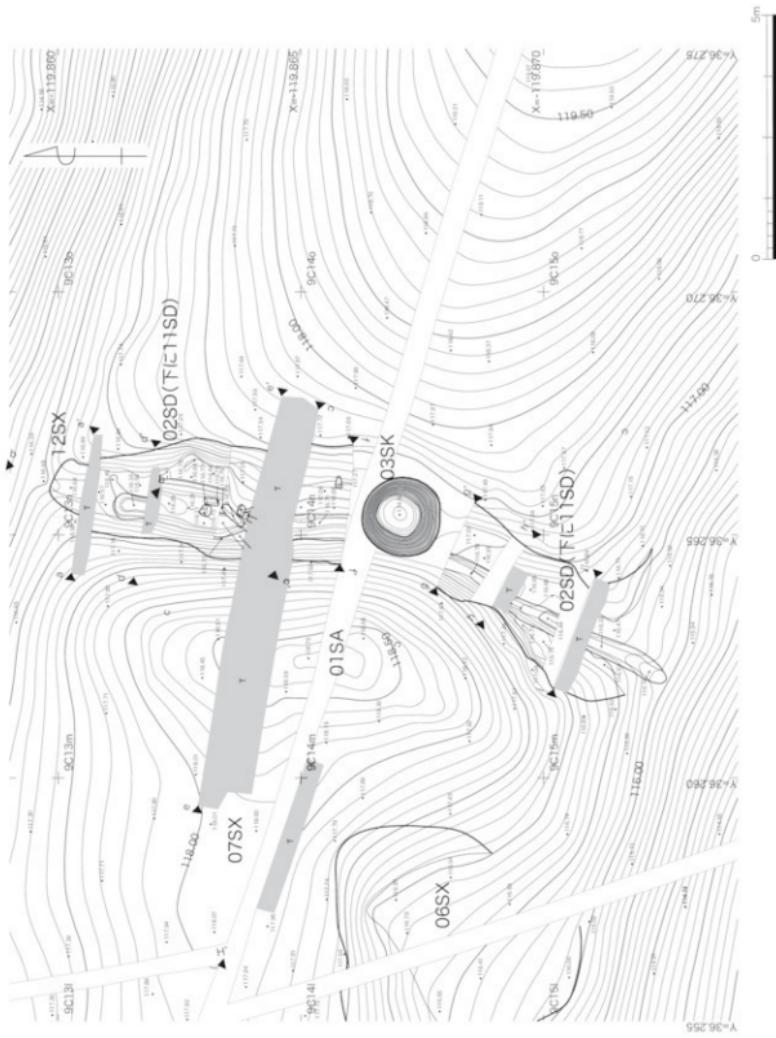
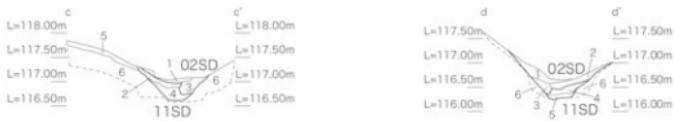
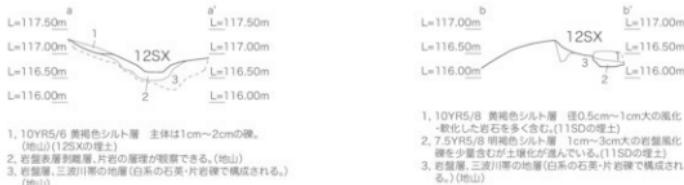


図10 10A区01SA・02SD・03SK・11SD・12SX (1:100)



1, 10YR5/6 黄褐色シルト層 上位の腐植土層の影響でやや暗い色調、2mm~10mmの大さの風化分解した礫片(石英・長石・片岩)を多く含み、5cm~10cmの大さの隙(孔)に巣む。(01SAの理土)
 2, 10YR5/6 黄褐色シルト層 2mm~10mmの大さの硬い隙を主体に含み、5cm~10cmの大さの硬い隙を部分的に含む。(地山01SAの理土)
 3, SYR5/6 混赤褐色シルト層-7.5YR5/6明褐色シルト層 従2mm~10mmの大さの硬(風化)を主体に、2cm~3cmの大さの隙を若干含む。(地山)
 4, 10YR5/6 黄褐色シルト層 2mm~5mmの大さの硬い隙を含む。(地山)
 5, 7.5YR5/6 明褐色シルト層 基盤(岩盤)層、上面で風化が激しい、片岩の割離層。(地山)
 6, 10YR5/6 黄褐色シルト層 従1cm~2cmの大さの風化岩盤隙を多く含み、土壌化が進む。(02SDの理土)
 7, 2.5Y5/6 明褐色シルト層 2cmの大さの風化隙を少量含むが、主に粘性的な粘土シルト層で、10YR4/6褐色シルト層を含む。(02SDの理土)
 8, 10YR5/4 4.5に近い黄褐色シルト層 従1cmの大さの比較的硬い隙を多く含む。(02SDの理土)
 9, 10YR5/6 黄褐色シルト層 従1.5cm~2cmの大さの風化・軟化した岩石を多く含む。(11SDの理土)
 10, 10YR5/6 黄褐色シルト層 従1cm~2cmの大さの風化岩盤隙を多く含み、土壌化が進む。(地山)
 11, 10YR5/6 黄褐色シルト層 従1cm~2cmの大さの風化岩盤隙が主体で、土壌化が進む。(地山)
 12, 5YR5/6 明赤褐色シルト層 三波川帯の岩盤地山

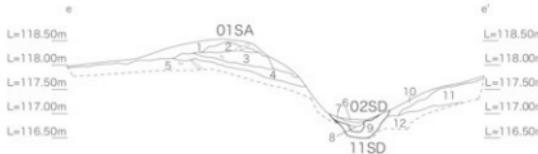


図 11 10A 区個別遺構断面図 1 (1:100)



図 12 10A 区個別遺構断面図 2 (1:100)

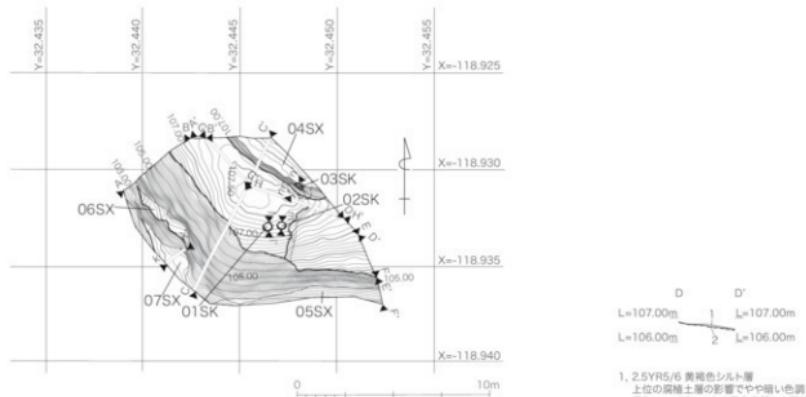


図 13 中山峠跡 10B 区 (1:250)

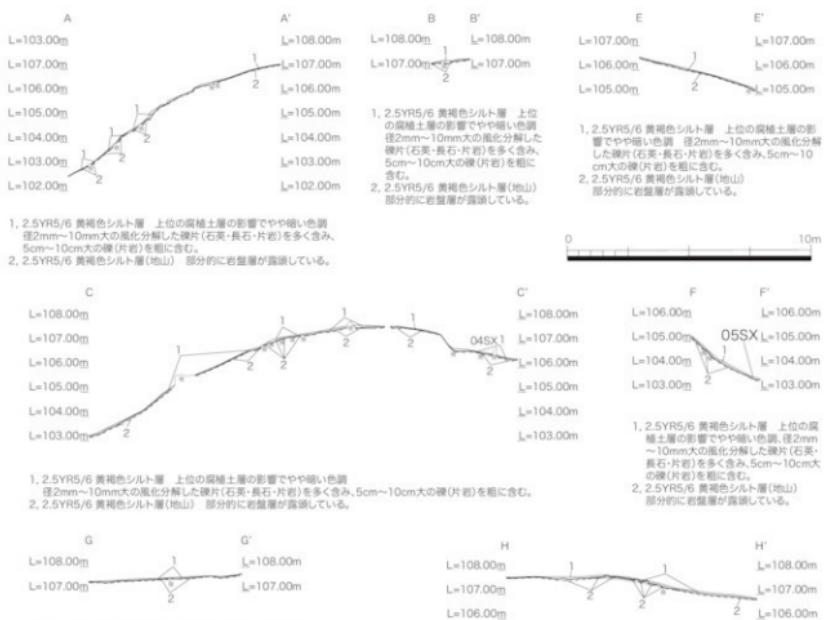


図 14 10B 区セクション図 (1:200)



図15 10B区個別遺構断面図 (1:100)

長径 8.5m、幅 1.4m、深さ 0.30m を測る。平場面は標高 104.00m 付近でやや谷がある南東に少し下がって傾斜していた。埋土は上層に表土である黒褐色腐植土があり、下層に黄褐色の岩盤の風化礫が堆積していた。07SX：丘陵南斜面を平面菱形に削りだした平場で、長径 8.0m、幅 3.0m、深さ 0.30m を測る。平場面は標高 103.15m 付近でやや谷がある南東に少し下がって傾斜していた。埋土は上層に表土である黒褐色腐植土があり、下層に黄褐色の岩盤の風化礫が堆積していた。

第4節 鉄 鎌

出土遺物では、平面平根形の鉄鎌が1点のみ確認された。基部が折れているが、長さ10.4cm以上、刃幅2.0cm、刃部厚み0.3cm、刃の長さ5.5cmあるもので、刃部に長さ1.2cm、幅0.5cmの菱形の透かし孔がみられる。基部は刃部側で幅0.5cm、厚み0.5cmを測る。この鉄鎌は、愛知県清須市朝日西遺跡の16世紀末頃の遺構から出土した鉄鎌と透かしの形は異なるが、形態が類似する。

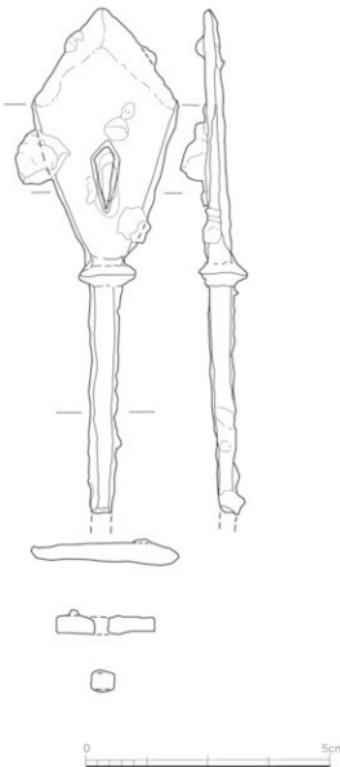


図16 鉄鎌実測図 (1 : 1)

第3章 総 括

第1節 中山砦跡の遺構について

愛知県教育委員会による中世城館跡の調査による縄張り図においても、10A区の丘陵尾根の堀切02SDと土塁01SAは記録され、猪垣と指摘されている。発掘調査においても、地表面から見えていた02SDは中央にある03SEの南北を掘り下げて(04SKと05SK)、03SKを落とし穴として利用した形跡が推定できた。この為、地表面から見えていた02SDは、土塁の01SAとともに猪垣として機能したものと思われる。しかし、02SDの下層部は、地表面でみられる形状とは異なり、断面「V」字状の溝となり、溝の北端部分を高さ0.50m程掘り残した土橋12SXを確認できた。また02SDの下で確認した11SD、これらに伴うと思われる01SAは、戦国時代の遺構の可能性が高い。遺物の出土や他の遺構との関連もないため、結論を出すことはできないが、02SDと11SDはほぼ同じ位置にあり、二つの

可能性がある。一つは02SDと11SDは同時期(天正三年の武田軍)のもので、11SDを掘削した後、少し埋めて何らかの施設を設けた痕跡を02SDと考える可能性、もう一つは02SDと11SDは2時期の遺構と考えて、下層の11SDが天正元年の徳川軍のもの、02SDが天正三年の武田軍のものと考える可能性である。

その他の10A区の平場遺構06SX～09SXは、尾根に登るための道に伴う可能性があり、現在に近い時期の遺構と思われた。また、10B区で確認できた土塁3基01SK～03SKと平場遺構04SX～07SXがある。土塁01SK～03SKは地表面から確認できた現在に近いもので、04SXも地表面から確認できた点から、現在に近い新しいものと思われる。10B区の丘陵南斜面に確認できた05SX～07SXは地表面から確認できなかった遺構であるが、05SXは平場というより緩斜面であり、また06SXと07SXは平場であるが、埋土が表土の腐植土とは異なるが、あまり締まりがないものであったため、比較的新しい時期のものと考えられた。

以上の検討から、土塁01SAと堀切02SD・11SDは戦国時代の遺構と考えられたが、その他は近世以後の比較的新しい時代のものと考えられた。10B区の北側にある丘陵尾根の先端に、縄張り図において調査されている平場に土留めと思われる石垣がみられるが、川原石の円礎を積み上げたもので、現在に近いものと考えられる。このことも発掘調査で確認できたように、現在残る平場が比較的新しい時代に畑や植林などで造成された結果を反映したものと思われる。

第2節 中山砦跡出土の鉄鎌について

今回の調査において出土した鉄鎌は、有職故実などの研究から、野矢の鎌で尖根(尖矢)の平根のもので、尖矢は狩猟用の矢に用いるものと述べられている(中澤2006)。しかし、中山砦跡において出土した鉄鎌は、愛知県清須市朝日西遺跡から出土している鉄鎌と類似することから、長篠・設楽ヶ原合戦に伴う可能性が高く、戦闘に伴い使われたものと考えられる。

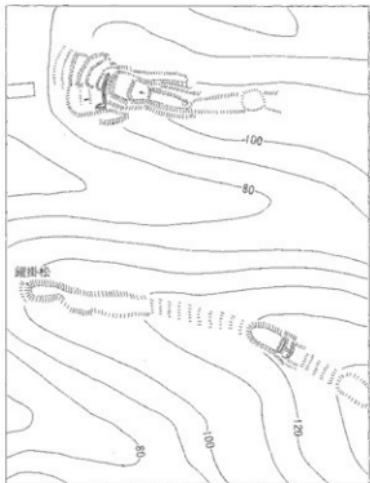


図 17 中山砦跡縄張り図

(石川浩治氏作図、愛知県教育委員会 1997『愛知県中世城館跡調査報告Ⅲ』(東三河地区)より転載)

そこで東海地域において出土している室町時代後半・戦国時代（15世紀～16世紀）の遺跡から出土している鉄鏃と比較してその特徴を述べたい。

現在、愛知県内で確認できる室町時代後半・戦国時代（15世紀～16世紀）の鉄鏃は7遺跡から27点ある。

清須市朝日西遺跡より2点、同清洲城下町遺跡より7点、船津市下津宿遺跡より6点、岩倉市御山寺遺跡より4点、名古屋市名古屋城三の丸遺跡より1点、瀬戸市桑下城跡より1点、同惣作・鐘場遺跡より3点、豊田市城山城跡より3点出土している。

岐阜県では2遺跡9点ある。関市重竹遺跡A地点より15世紀後半～17世紀前半の時期のもの4点、県財團による重竹遺跡より中世とされる4点、土岐市妻木城土屋敷跡より中世のもの1点がある。

三重県では6遺跡24点ある。主に15世紀～16世紀のもので、四日市赤堀城跡より1点、伊賀氏阿山町杉田氏城跡より1点、津市東川遺跡より1点、桑名市志知南浦遺跡より1点、亀山市小野城跡より1点、津市多気遺跡群より17点ある。

この中で、中山砦跡出土の鉄鏃と同様に、刃部の平面形が先端側に幅広部がある菱形のものは、朝日西遺跡に1点（1）、城山城跡に2点（25・27）、惣作・鐘場遺跡に1点（24）ある。先に述べた朝日西遺跡の鉄鏃は16世紀末頃の遺構から出土しており、清洲城下町遺跡の一部とも考えられる遺跡であるので、織田氏と関係する氏族が統治した遺跡である。城山城跡は、豊田市足助町の北にある山上に築かれた城跡で、出土した鉄鏃も16世紀後半に今川氏方の在地勢力と徳川氏、武田氏が攻防を繰り返した要地に関連するものである。惣作・鐘場遺跡から出土したものは、報告においても時期と全形が明瞭ではないものである。

よって刃部形態が類似するものが、少ながら室町時代後半以後・戦国時代の複数の遺跡で確認できる。透かしの形態等の詳細な部分を除けば、中山砦跡から出土した鉄鏃と同じ形態のものが、愛知県内では中山砦跡を含めて4遺跡から出土しており、一定の割合で存在した可能性が高いことを示すものである（中山砦跡出土例を含めて、8遺跡28点中5点）。しかし、これまでの中世における鉄鏃の研究では、刃部の平面形態が、菱形（柳葉形）で幅広部が基部側にあるものが、

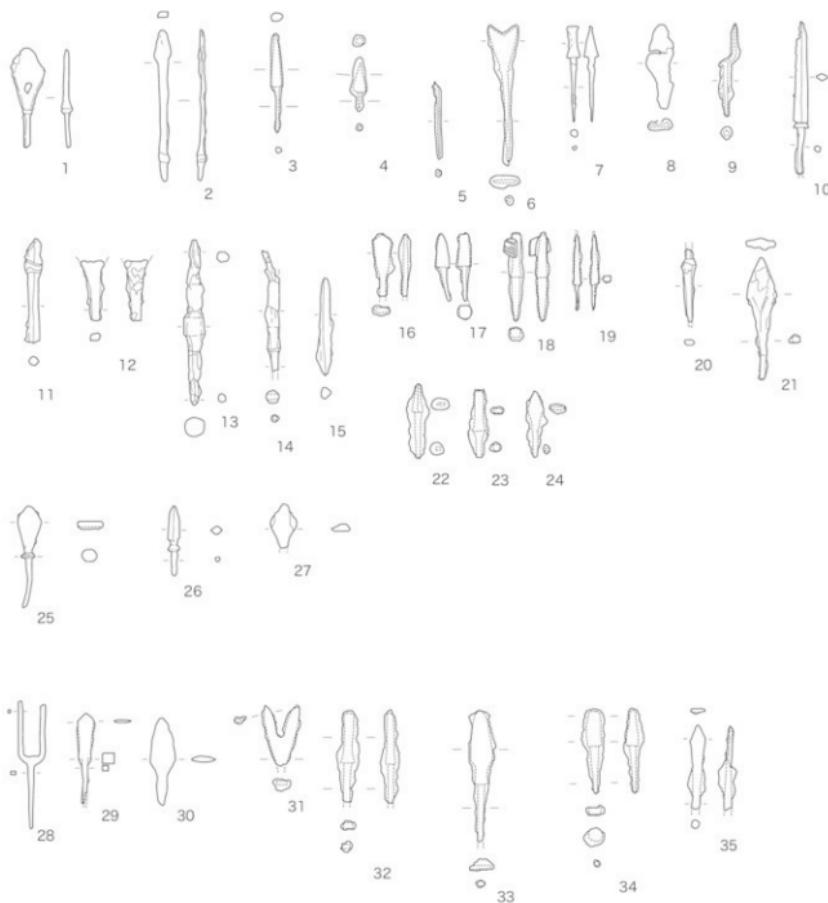
15世紀～16世紀にあることが指摘されているが、中山砦跡で出土したような刃部の形態のものは紹介されていない（津野1990、小林1997）。中山砦跡で出土した鉄鏃のタイプのものは、戦国時代の愛知県における地域性を示す資料の可能性がある。

また、中山砦跡のタイプとは異なる鉄鏃の形態で、複数の遺跡でみられるものが3タイプある。一つは刃部の平面形が尖り根の先細りする形態で、刃部断面が方形から長方形のもので、清須市清洲城下町遺跡に3点（3・4・7）、岩倉市御山寺遺跡に2点（17・19）、瀬戸市惣作・鐘場遺跡に1点（22）、関市重竹遺跡に1点（34）、四日市赤堀城跡に1点（36）、亀山市小野城跡に1点（41）、津市多気遺跡群に1点（57）ある。このタイプの鉄鏃は、東海地域に広く分布する。二つ目は刃部の平面形が二股のフォーク状の形態のもので、清洲城下町遺跡に1点（9）、関市重竹遺跡A地点に1点（28）、小野城跡に1点（41）、多気遺跡群に14点（43～48・50～52・54～56・58・59）あり、三重県の多気遺跡群に多くの類例がみられる。三つ目は刃部の平面形が基部側に幅広部がある菱形で平根のタイプのものは、清洲城下町遺跡に1点（8）、瀬戸市桑下城跡に1点（21）、重竹遺跡A地点に1点（30）、重竹遺跡に1点（33）、多気遺跡群に1点（53）があり、中山砦跡のタイプに近い平面形をもつもので、全国的にも類例が多いものである。

その他に付編において述べる長篠城跡史跡保存館に保管されている鉄鏃にみられるタイプとして、刃部の平面形が鈎のある細身の柳葉形のもので断面が方形から菱形の形状のものがある。発掘調査による資料においても清洲城下町遺跡に1点（10）、城山遺跡に1点（26）があり、戦国時代の特徴を示す形態のものと思われる。

第3節　まとめ

以上の調査成果により、長篠・設楽ヶ原合戦において、武田方の乗本五番の一つとして文献資料の記録から知られていた中山砦跡について、戦国時代にさかのぼる可能性の高い遺構と当時の戦いに使用されたと考えられる鉄鏃を確認し、不十分な点は多いが記録に残る中山砦跡の姿の一端を表現できたものと思われる。これ



(愛知県)

1・2：清須市朝日西遺跡、3～10：清須市清洲城下町遺跡、11～15：稻沢市下津宿遺跡、

16～19：岩倉市御山寺遺跡、20：名古屋市名古屋城三の丸遺跡、21：瀬戸市桑下城跡、

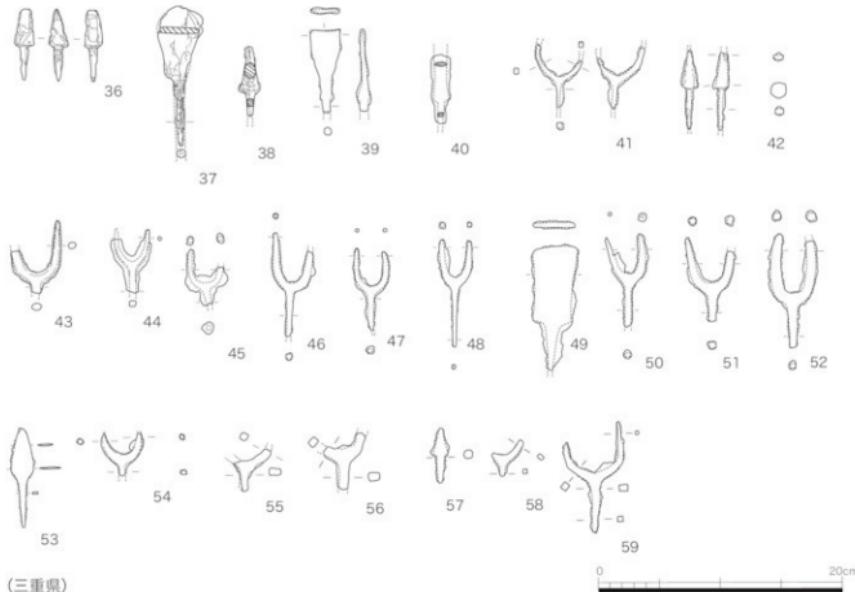
22～24：瀬戸市惣作・鐘塙遺跡、25～27：豊田市城山城跡

(岐阜県)

28～30：関市重竹遺跡A地点、31～34：関市重竹遺跡、35：土岐市妻木城士屋敷跡



図 18 戦国時代における東海地方の鉄鎌 1 (1:4、実測図は各報告書の図を再トレース)



(三重県)

36: 四日市市赤堀城跡 2、37・38: 伊賀市阿山町杉田氏城跡、39: 津市東川遺跡、40: 桑名市志知南浦遺跡、
41・42: 駿河市小野城跡、43・44: 津市多気遺跡群、45~52: 津市多気遺跡群Ⅱ、
53: 津市多気遺跡群伝本願寺跡調査区、54: 津市北畠氏館跡 7、55・56: 津市多気北畠氏遺跡第 31 次 (多気六田地区第 5 次)、
57・58: 津市多気北畠氏遺跡第 32 次 (多気六田地区第 6 次)、59: 津市多気北畠氏遺跡第 34 次 (多気六田地区第 7 次)

図 19 戦国時代における東海地方の鉄鎌 2 (1:4、実測図は各報告書の図を再トレース)

らの成果が、多くの方々に検証され、今後の地域研究や戦国時代の研究に役立てられることを願いたい。

参考文献

津野仁 1990 「古代・中世の鉄鎌」『物質文化』物質文化研究会

小林康幸 1997 「中世鉄鎌研究ノート—合戦の鎌、そして儀仗の鎌—」『多知波奈考古』第 2 号、橋考古学会

梅本博志・安藤義弘編 1997 「愛知県中世城館跡調査報告」Ⅲ (東三河地区) 愛知県教育委員会

中澤克昭 2006 「居館と武士の職能—出土鉄鎌と狩獵をめぐって—」『鎌倉時代の考古学』高志書院

報告書

(愛知県)

小澤一弘編 1992 『朝日西遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 28 集」財團法人愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴編 1994 『清洲城下町遺跡IV』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集」財團法人愛知県埋蔵文化財センター

都築 也編 『島田陣屋遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 58 集」財團法人愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴・宮腰健司他 2002 『清洲城下町遺跡VII』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集」財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財セン

タ-

水井邦仁編 2005『城山城跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 122 集」財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

酒井俊彦編 2008『憩作・鐘場遺跡 II』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 150 集」財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター

武部真木編 2008『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集」財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター
柴垣哲彦・桐山秀穂・鈴木恵介・町田義哉 2009『清洲城下町遺跡 II』「清須市埋蔵文化財調査報告 II」愛知県清須市教育委員会

石黒立人 2011『御山寺遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 167 集」公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター

植上 昇編 2013『下津宿遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 175 集」公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター

小澤一弘編 2013『桑下城跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 181 集」公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター

(岐阜県)

篠原英政他 1984『重竹遺跡-その 3-』「関市文化財調査報告第 8 号」関市教育委員会

中島 茂編 2002『妻木城-妻木城跡・土屋敷跡発掘調査報告書-』岐阜県土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター

長谷川幸志・坂東肇・伊藤利巳編 2005『重竹遺跡・上西田遺跡・洞雲戸遺跡』「岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 91 集」財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

(三重県)

春日井恒・上垣幸徳 1989『赤堀城跡 2』「四日市市遺跡調査会文化財調査報告書 VI」四日市市遺跡調査会

藤井尚登 1990『杉田氏城跡発掘調査報告書』「阿山町埋蔵文化財調査報告第 3 集」阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会

竹田憲治他 1994『六地蔵 A 遺跡・六地蔵 B 遺跡・高塚穴跡・東川遺跡』「三重県埋蔵文化財調査報告 116-

I」三重県埋蔵文化財センター

竹田憲治・酒井巳紀子編 2008『志知南浦遺跡発掘調査報告』「三重県埋蔵文化財調査報告 288」三重県埋蔵文化財センター

長谷川哲也編 2010『小野城跡発掘調査報告-第 4・5・6 次調査-』「三重県埋蔵文化財調査報告 315-1」三重県埋蔵文化財センター

伊藤裕偉 1993『多気遺跡群発掘調査報告』「三重県埋蔵文化財調査報告 109」三重県埋蔵文化財センター

伊藤裕偉 1996 编『多気遺跡群発掘調査報告 III-一志郡美杉村上多気字小津所在、伝善永寺跡、伝本願寺跡の調査-』「三重県埋蔵文化財調査報告 137」三重県埋蔵文化財センター

越賀弘幸編『多気遺跡群発掘調査報告 II』「三重県埋蔵文化財調査報告 136」三重県埋蔵文化財センター

小林俊之編 2004『北畠氏館跡 7-多気北畠氏遺跡第 21 次調査-』「美杉村文化財調査報告 10」三重県美杉村教育委員会

石淵誠人 2009『多気北畠氏遺跡第 31 次調査報告-上多気六田地区第 5 次-』「津市埋蔵文化財調査報告書 19」津市教育委員会

藤田充子 2011『多気北畠氏遺跡第 32 次調査報告-上多気六田地区第 6 次-』「津市埋蔵文化財調査報告書 23」津市教育委員会

熊崎 司・小川陽子 2012『多気北畠氏遺跡第 34 次調査報告-上多気六田地区第 7 次-』「津市埋蔵文化財調査報告書 30」津市教育委員会

熊崎 司 2013『多気北畠氏遺跡発掘調査報告-多気北畠氏遺跡第 35 次・上多気六田地区総括編-』「津市埋蔵文化財調査報告書 33」津市教育委員会

付編 長篠城址史跡保存館保管の鉄鎌・鉄槍

第1節 はじめに

長篠城址は愛知県新城市（旧南設楽郡鳳来町）長篠にあり、天正三年（1575）における長篠城攻防戦の地として知られている。当時の合戦を伝える資料として、合戦に使用された鎌や槍の伝世資料や長篠城址付近で採集された鎌の資料が、長篠城址史跡保存館において展示・保管されている。今回は中山砦跡で出土した鉄鎌との関連やその歴史的性格を明らかにするため、長篠城址史跡保存館に展示・保管されている鉄製槍と鎌の資料調査を行った。以下に資料を紹介し、若干の考察をしたい。

第2節 長篠城址史跡保存館保管の資料

まず、長篠城址史跡保存館において保管されている資料の紹介をする（第1図）。

（1）鉄鎌 東照宮下賜 田原矢の根 銘 スケミチ（京都市生田君子氏所蔵資料）

1・2は木箱に2本1組で納められている鉄製の鎌で、刃部の平面は幅が狭い柳葉形で基部側に抉りあるもので、中央に鎬がみられる横断面が菱形のものである。刃部の先端は実際に使用されたためか、先端部がやや丸くなっている。基部は細長く、横断面が方形になるもので、刃部の近くにタガネ彫りの「スケミチ」の銘がある。全体の大きさは1が長さ15.75cm、重さ12.3g、2が長さ15.95cm、重さ14.7gで、刃部の大きさは1が長さ4.1cm、幅0.9cm、厚み0.6cm、2が長さ4.2cm、幅0.9cm、厚み0.6cmをはかる。基部は1・2とも幅と厚みが0.3cm前後である。刃部には長辺に沿った研磨痕がみられる。鉄鎌の分類では、征矢の柳葉形のタイプになる。

（2）鉄鎌 本丸出土鉄鎌（林英太郎氏寄贈資料）

3.4も木箱に2本1組で納められている鉄製の鎌で、刃部の平面は幅が狭い柳葉形で基部側に抉りあるもので、3は片面の中央に鎬がみられる横断面が三角形のもの、4が中央に鎬がみられる横断面が薄い菱形であ

る。刃部の先端は、3は尖っているが、4は実際に使用されたためか、先端部がやや丸くなっている。基部は細長く、横断面が方形になるものである。銘はない。全体の大きさは、3が長さ13.05cm、重さ9.8g、4が長さ13.00cm、重さ10.6gで、刃部の大きさは3が長さ2.9cm、幅0.7cm、厚み0.7cm、2が長さ5.0cm、幅1.0cm、厚み0.3cmをはかる。基部は1・2とも幅と厚みが0.3cm前後である。鉄鎌の分類では、征矢の柳葉形のタイプになる。

（3）鉄鎌（松力 哲氏提供資料）

5は刃部が刀子形の鉄製鎌で、全体に鎬があり、先端部と基部が欠損している。全体の長さは10.4cm、重さ15.0gで、刃部の幅は1.4cm、厚み0.4cm、基部の幅0.6cm、厚み0.2cmをはかる。刃部の推定の長さは8cmである。6は刃部の先端側がやや細くなる柳葉形の鉄製鎌で、刃部の横断面は片面の中央に鎬のある扁平な三角形、基部の横断面がやや面取りされている八角形から円形である。全体の大きさは長さ16.5cm、重さ25.5gで、刃部の長さは7.8cm、幅1.2cm、厚み0.4cmをはかる。基部の先端は径0.4cmの球形に膨らむ形態になっている。

（4）鉄鎌（鳳来町 林 栄太郎氏寄贈資料）

7・8は刃部が「V」字形の狩俣鎌で、8は基部を欠損している。7は全体の長さが17.2cm、重さ37.9gで、刃部の大きさは、長さ7.65cm、幅4.2cm、厚み0.4cmをはかる。刃部は「V」字形の内側に刃が付けられており、刃部の先端から刃の奥行きは3.8cmである。基部は横断面方形で、幅・厚みが0.4cm前後である。8は残存分の長さが9.5cm、重さ20.1gで、刃部の大きさは、長さ6.3cm、幅3.45cm、厚み0.4cmをはかる。刃部は7と同様の形態で、刃部の先端から刃の奥行きは3.1cmである。基部は横断面方形で、幅・厚みが0.4cm前後である。

（5）本丸出土鉄鎌（個人蔵）

9は重量が69.0gあり、小型の槍の可能性もある刃部が柳葉形の鉄製鎌で、全体の長さが17.1cm、刃部の大きさが長さ9.6cm、幅1.95cm、厚み0.5cm前

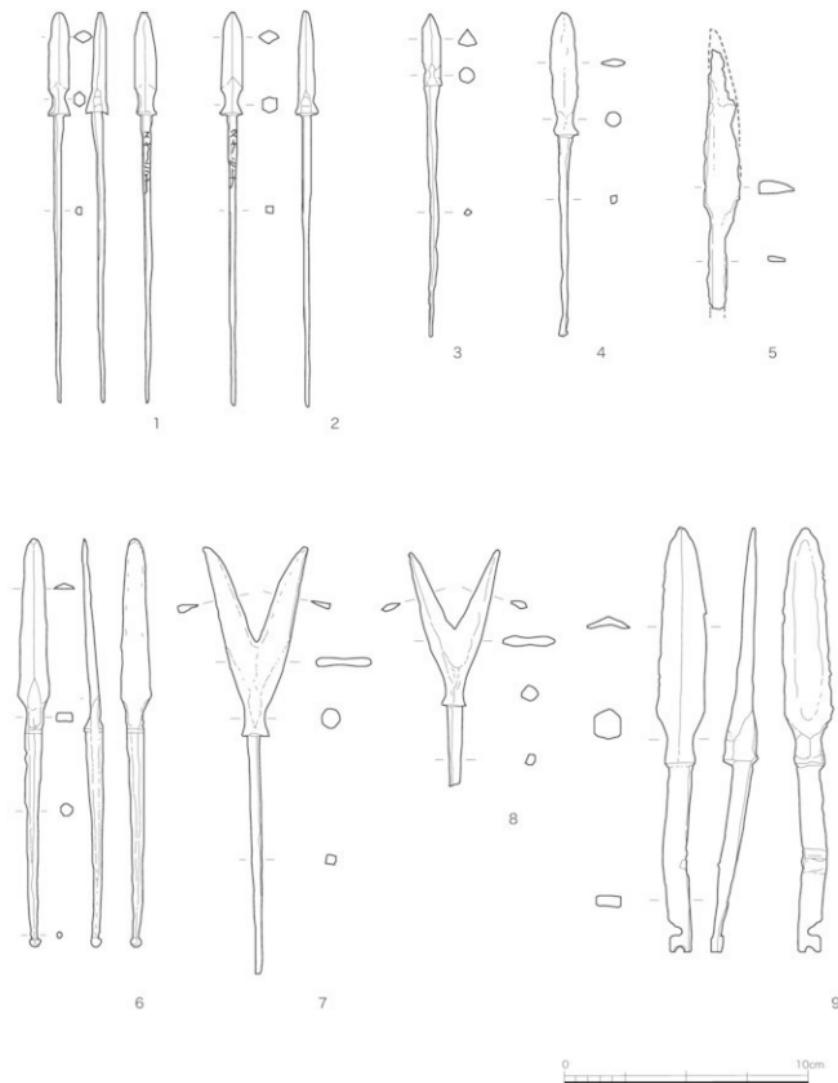
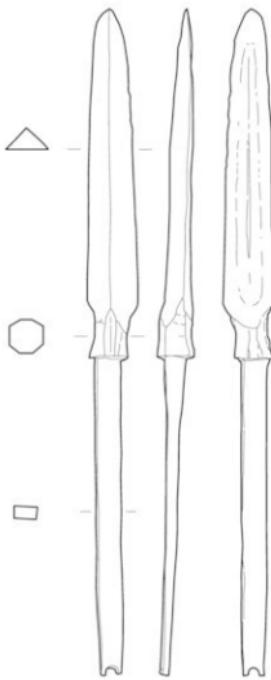


図 20 長篠城址史跡保存館保管の鉄鎌（1:2）



10



11



図21 長篠城址史跡保存館保管の鉄槍 (1:2)

後をはかる。刃部は片面に鎌があり、反対の面が内側に薄くなる形態となっている。基部は幅 0.9cm、厚み 0.6cm 前後の横断面長方形で、先端に半円形の抉りと隅丸三角形の抉りがあり、鎌を留めるためのものと思われる。基部の中央付近に右からの衝撃で少し屈折している。

(6) 大通寺所蔵資料

10・11は鉄製の槍で、刃部が柳葉形のものである。10は全体の長さが 38.7cm、重さ 233g、11は全体の長さが 23.9cm、重さ 97.8g である。10の刃部は、長さ 14.4cm、幅 2.1cm、厚み 1.0cm の横断面中央に鎌がある菱形で、基部は幅 1.0cm、厚み 0.6cm の横断面長方形で、刃部側の片面に「美濃守忠常」のタガネ彫りの銘があり、その下に径 0.2cm 程の目釘穴がある。11は刃部の先端側や細くなる柳葉形で、横断面は片面の中央に鎌がある三角形で、刃部の大きさは長さ 12.5cm、幅 1.9cm、厚み 0.8cm 前後をはかる。刃部の鎌のない片面は中央がややへこむ形態である。基部は横断面長方形で、幅 0.75cm、厚み 0.4cm 前後をはかる。基部の先端に半円形の抉りがあり槍を柄に留めるためのものと思われる。

第3節 鉄鎌・鉄槍の特徴

今回の調査をした鉄鎌・鉄槍は、天正期における織田・徳川軍と武田軍において使用された可能性が高い資料で、戦国時代の槍が盛行した時代を反映したものと思われる。それでは、今回紹介した鉄鎌は、中山砦跡出土の鉄鎌とあわせて、鉄鎌自体の形態的特徴、その形態の組み合わせについて若干の検討をしたい。

今回紹介した 1～4 は、征矢の刃部が柳葉形の鎌作りとよばれる形態のもので、刃部の基部側が六面に面取りされて抉られ、関が再び太くなるものである。これらは同一型式と考えられるが、「スケミチ」銘の 1・2 は形態が類似するが、3・4 は刃部の横断面や基部の長さなどで異なる。7・8 は野矢の狩俣鎌で、鎌矢として使用された可能性もあるもので、この 2 点は形態も類似する。5・6 は征矢に分類されるものと思っているが、5 は片刃のもの、6 が柳葉形の槍の刃部の形態に近いものである。9 は刃部が柳葉形で、槍先になる可

能性もある。第 3 章で述べた愛知県内において出土している室町時代後半・戦国時代（15世紀～16世紀）の遺跡から出土している鉄鎌では、7 遺跡 27 点中で刃部の形態が分かるものが 16 点確認できた。その内訳は、清須市朝日西遺跡に平根の刃部が菱形のもの 1 点、刃部が菱形から三角形の小さいもの 1 点、同清洲城下町遺跡より刃部の横断面が方形で平面形は細長い三角形である角根のものが 2 点、平根の「Y」字形のものが 1 点、横断面長方形の角根になる平面長方形の中央が抉れるものが 1 点、平根で長三角形状柳葉形のものが 1 点、鎌作りで細長い柳葉形のものが 1 点、瀬戸市桑下城跡から平根で平面菱形のもの 1 点、岩倉市御山寺遺跡から平根の平面五角形のもの 1 点、横断面が長方形になる角根で平面長方形のもの 1 点、瀬戸市惣作・鐘場遺跡から平根の平面菱形になるもの 1 点、豊田市城山城跡から平根の平面菱形のもの 2 点、平面柳葉形の鎌作りのもの 1 点がある。今回紹介した 1～4 は、城山城跡出土の鎌作りの柳葉形の鉄鎌と類似しており、遺跡の時期と遺跡をめぐる当時の政治情勢が長篠城跡と類似する点で興味深い。5～9 は、愛知県内において同様な形態をもつものは知られていない。また、10・11 のような鉄槍は、管見に及ぶ中では確認できていない。

第4節まとめ

以上の分析から、愛知県内の遺跡から出土した 15 世紀～16 世紀の鉄鎌の中で主要な形態は 3 タイプあり、中山砦跡から出土した刃部の平面形が先端部側に幅広部がある菱形で平根のもの、長篠城址保存館に展示・保管されている鎌作りの平面形が細い柳葉形のもの、横断面が長方形になる角根で平面形が長方形のものがある。この中で鎌作りの細い柳葉形のものは、津野氏による古代から中世の鉄鎌の研究では、14 世紀以後に鎌作りの鉄鎌が出現するようで、福井県一条谷朝倉氏遺跡で同様の形態のものがみられ、16 世紀後半の主要な鉄鎌形態と思われる。また 7・8 のような狩俣鎌は鎌倉時代以前から存在する鎌矢にも使用されるタイプのもので、鉄鎌の全体の構成の中では少数保有される野矢と思われる。刃部に様々な透かしが施されたものがみられるなど、貴重なものである。

資料調査に際して、長篠城址史跡保存館の山内祥三氏、新城市教育委員会の岩山欣一氏には大変お世話になりました。記して感謝の意としたい。

参考文献

- 津野仁 1990 「古代・中世の鐵鑄」『物質文化』物質文化研究会
- 小林康幸 1997 「中世鐵鑄研究ノート—合戦の鐵、そして儀杖の鐵—」『多知波奈考古』第2号、橋考古学会
- 梅本博志・安藤義弘編 1997 『愛知県中世城館跡調査報告』Ⅲ（東三河地区）愛知県教育委員会
- 中澤克昭 2006 「居館と武士の職能—出土鐵鑄と狩獵をめぐって—」『鎌倉時代の考古学』高志書院
報告書
- 小澤一弘編 1992 「朝日西遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集』財團法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴編 1994 「清洲城下町遺跡IV」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集』財團法人愛知県埋蔵文化財センター
- 都築一也編『鳥田陣屋遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第58集』財團法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴・宮腰健司他 2002 「清洲城下町遺跡VII」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集』財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁編 2005 「城山城跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第122集』財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 酒井俊彦編 2008 「惣作・鐘場遺跡II」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第150集』財團法人愛知県教育・スポーツ振興財团・愛知県埋蔵文化財センター
- 武部真木編 2008 「名古屋城三の丸遺跡VII」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第161集』財團法人愛知県教育・スポーツ振興財团・愛知県埋蔵文化財センター
- 柴垣哲彦・桐山秀徳・鈴木恵介・町田義哉 2009 「清洲城下町遺跡II」『清須市埋蔵文化財調査報告II』愛知県清須市教育委員会
- 石黒立人 2011 「御山寺遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集』公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財团・愛知県埋蔵文化財センター
- 樋上昇編 2013 「下津宿遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第175集』公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財团・愛知県埋蔵文化財センター
- 小澤一弘編 2013 「桑下城跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第181集』公益財團法人愛知県教育・スポーツ振興財团・愛知県埋蔵文化財センター



中山砦跡より長篠城趾を望む（南東より）



中山砦跡を望む（西より、写真左侧に長篠城趾）

写真図版 2



調査前全景（土空より）



調査前の 10A 区全景（北より）



調査前の 10A 区全景（北西より）



調査前の 10A 区 01SA・02SD・03SK（東より）



調査前の 10A 区 01SA・02SD・03SK（南より）



調査区遠景（北西より）



調査区遠景（西北西より）



調査区上空より設楽ヶ原を望む（東より）

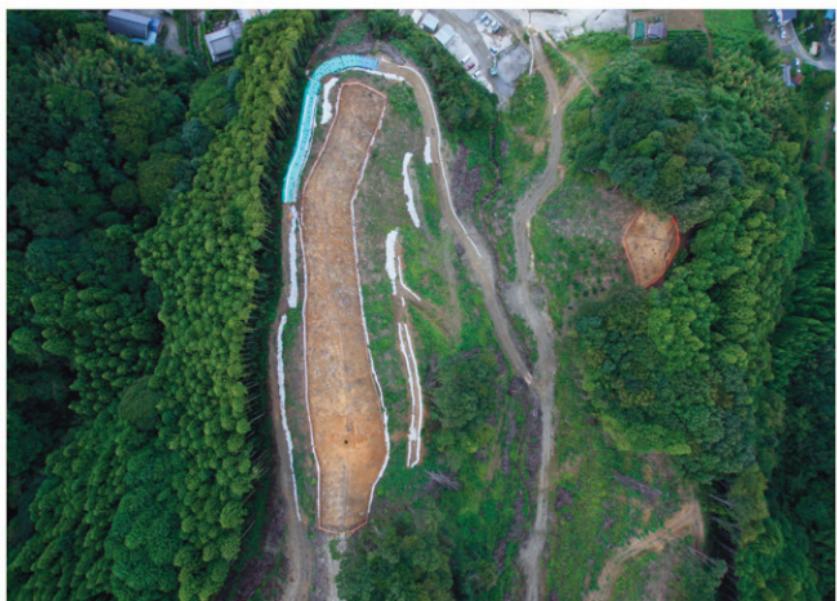


長篠城趾（南より）



調査区全景（南東より）

写真図版 4



調査区全景（上空より）



10A 区全景（上空より）



調査区全景（南東より）



10A 区全景（北東より）



調査区全景（西北西より）



10B 区全景（東南東より）



10B 区全景（南西より）



10A 区中央付近から西側先端部（南東より）



10A 区西側部分（南東より）



10A 区全景（東より）

写真図版 6



10A 区 09SX（南東より）



10A 区西側丘陵先端部（南東より）



10A 区西側丘陵先端部の土層断面（南東より）



10A 区西側南斜面の土層断面（南東より）



10A 区西側北斜面・08SX（東より）



10A 区鉄鐵出土状態（西より）



10A 区東側部分、頂部は 07SX（西より）



10A 区 07SX（南東より）



10A 区 06SX・07SX(西より)



10A 区 東端部分 (西より)



10A 区 東壁、丘陵上部から北斜面 (西より)



10A 区 01SA・02SD・03SK (南東より)



10A 区 01SA・02SD・03SK (北より)

写真図版 8



10A 区 02SD 完掘、11SD 検出状況（北西より）



10A 区 11SD、礫出土状況（南より）



10A区 01SA・11SD（南より）



10A区 01SA・11SD（北より）

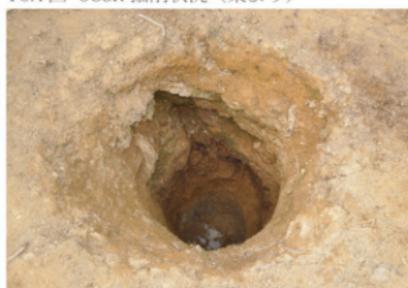
写真図版 10



10A 区 03SK 挖削状況（東より）



10A 区 03SK 土層断面（南より）



10A 区 03SK（南より）



10A 区 04SK（南東より）



10A 区 05SK（北東より）



10A 区 05SK 土層断面（東より）



10A 区 06SX（西より）



10A 区 10SK（西より）



10B 区全景（南より）



10B 区全景（南より）



10B 区平坦面（東より）



10B 区 07SX（南東より）



10B 区 07SX（北西より）



10B 区東側の南斜面（東より）



10B 区 04SX（東より）



10B 区 02SK（南西より）



鉄 鎖



鉄 鎖（側面）



鉄 鎖（平面）

報告書抄録

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第193集

中山砦跡

2015年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社